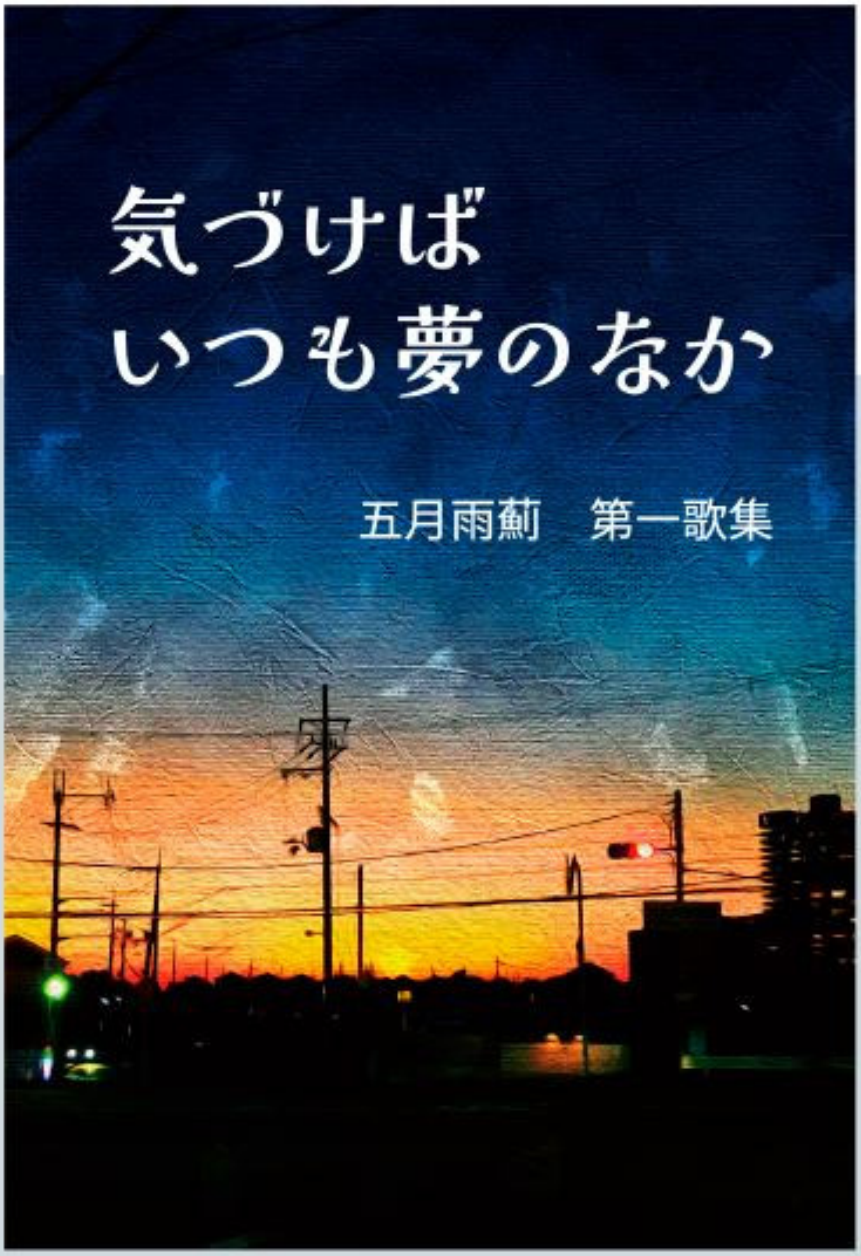
気づけば
いつも夢のなか
五月雨薊　第一歌集

目次

春眠のうた

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　1 3

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　2 4

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　3 5

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　4 6

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　5 7

夏のうたたね

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　1 11

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　2 12

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　3 13

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　4 14

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　5 15

秋の眠気

気づけばいつも夢のなか／秋の眠気　1 19

気づけばいつも夢のなか／秋の眠気　2 20

気づけばいつも夢のなか／秋の眠気　3 21

冬眠びより

気づけばいつも夢のなか／冬眠びより　1 25

気づけばいつも夢のなか／冬眠びより　2 26

気づけばいつも夢のなか／冬眠びより　3 27

春眠のうた

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　１

ゆったりと沼にしずんでゆくような眠気こらえる午後はながくて

吹き荒れる春一番は窓のそと僕はこたつで落花生をむく

蜜蜂に好かれる質で前世ではきみに摘まれた花なのでしょう

くだり坂リュックを揺らし駈けだせばスキップになる春はうららか

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　2

すべやかな脛を恥じらう少年の声はまもなくテノールになる

号外を勝訴のごとく掲げゆく「令和」の文字に街はあかるい

手のなかの小鳥はふるえながらでも野に放たれて群青になる

春の花ほころぶ頃にもうきみはいないひとりで焦がすベーコン

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　3

門扉には猛犬注意の文字がありラブラドールが尾を振っている

かなしみをくるんでつくる餃子だけ冷凍庫にて眠るひとつき

あなたへの最後の手紙したためてせめて明るい切手を選ぶ

迷惑じゃありませんかと猫に問う布団の縁でまるまりながら

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　４

気まぐれなきみが残していったものビニール傘と枯れたサボテン

悲しみは日暮れとともにやって来る二度と会えない人たちを連れ

階段をドレミのうたで駈け上がるこの春はまだひとりでもいい

手づかみで食べる夜更けのチェリーパイわたしのなかの獣が吠える

気づけばいつも夢のなか／春眠のうた　5

わずらって「普通」の日々をあきらめたわたしに届く出欠はがき

なみだには潮の記憶があるらしく心うらはら荒れてあふれる

夏のうたたね

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　1

それぞれに事情があってさみしくて寄り添っている夜のしじまに

留守電の敬語はひどく素っ気なくこれもきみだと言い聞かせている

会わないと誓ったひととすれ違う歩道橋には夏のざわめき

古ぼけて文字がかすれた付箋紙のきみのエールが僕を励ます

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　2

すっぴんで湯船に浸かるひとときは泣いてもいいと自分を許す

亡き母の戸籍謄本を取りに行く北区役所にジャズが流れる

何ひとつ捨てず惰性で真夜中にサッポロ一番分けあっている

盆明けの朝に混みあうビル街のひとの歩みはドナドナのよう

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　3

コンビニの外にさみしく誘蛾灯鳴れば命が焦げてゆく夏

哀しみに果てはないからブランコを立ちこぎしよう靴をとばそう

ひまわりの山吹色に魅せられて夏の終わりにスカートを買う

ダイニングチェアの噛み跡そこかしこあの子の影がまだ生きている

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　４

口下手なきみのとなりでひたすらに笛吹きラムネ噛みくだく夏

糸電話できるくらいの距離にいて横顔ばかりずっと見ている

おにぎりの海苔を巻けないもの同士生きづらいこと語りあおうね

聞き分けがよくなれずいてコンビニの外で飲み干すワンカップ酒

気づけばいつも夢のなか／夏のうたたね　5

ふたりきりいい雰囲気にやきもちか「通りますよ」と猫が割りこむ

列をなす続いたはずの言葉たち舌の先まで延びた渋滞

秋の眠気

気づけばいつも夢のなか／秋の眠気　1

僕たちの世界が終わる音がした日暮れがせまるマクドナルドで

通るたびきゃんきゃん鳴いたあの犬の小屋だけ残るいつもの小路

踏みつけたガムが気になり靴の裏ばかり見ている動物園で

誤解したうぬぼれだった馬鹿だった恋の終わりはいつも曇天

気づけばいつも夢のなか／秋の眠気　2

駅裏の風俗街に三日月がしんみり浮かびわめいても秋

地震より火事が恐いと言うひとの副流煙を吸わされている

水槽でひときわ目立つマンタだけずっと見ていた別れ話で

悩んでもしょうがないから踊ろうぜロックンロールの神さまは言う

気づけばいつも夢のなか／秋の眠気　3

唐揚げにレモンを絞る　許される境界線をさぐるみたいに

たましいのしたたり落ちる音がしてそっとさしだす涙の器

亡き母のスマホを解約し終わって駐車場にはとんぼ舞う秋

冬眠びより

気づけばいつも夢のなか／冬眠びより　１

福はうち鬼もうちという子の声で心やさしい鬼が棲みつく

メロンパンちぎり鳩呼びぶつけてはやつあたりした午後はからっぽ

北国のきみの手紙はひんやりと雪のにおいが薫る気がする

あのひとはうつくしいのにひとりきり人魚の肉を食べたせいだよ

気づけばいつも夢のなか／冬眠びより　2

世界じゅう罰を与えてまわるのは神さまだってきっとむなしい

芸はせずくうねるあそぶすこやかに生きていてくれそれだけでいい

コーヒーと煙草があれば想像の翼ひろげて僕は自由だ

壊れゆく国で今さら僕たちは生産的になりきれずいる

気づけばいつも夢のなか／冬眠びより　3

肉じゃがは豚か牛かでもめた日に譲れないことばかりかぞえる

積み上げた本がくずれて雑然とした部屋のなか流れるワルツ

家々の明かりが灯りそれぞれに帰り着くひと待つひとがいる

終電で忘れ去られた傘みたいきみが来るのをひたすらに待つ

気づけばいつも夢のなか

著　　五月雨薊

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社